

『アンコールワットの秘密～38年間の謎を訪ねて』

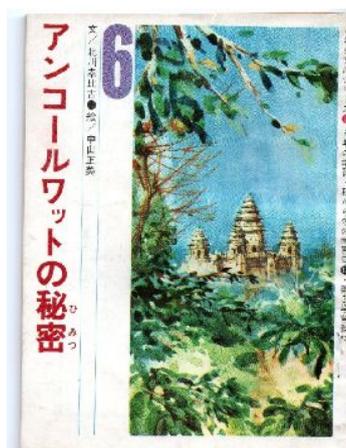
“世界遺産を巡る旅！～アンコールワットとアユタヤ&バンコク6日間”

[Club 21]

出発 平成19年12月30日(日)

帰国 平成20年1月4日(金)

小学校6年の学習(学研)の付録に『アンコールワットの秘密』(北川幸比古著)という小文庫本があった。フランス人の博物学者アンリ・ムーオによるアンコール遺跡の(再)発見について書かれた本であるが、その初頭にイギリスの著名な歴史家アーノルド・トレンビーの言葉が載っていたー“アンコールを見たら死んでもいい”ーそんなに素晴らしいのかあ～！この文庫は昭和44年12月1日発行となっているから、今から38年前のものである。以来、いつかはアンコールワットを訪れてみたいと思っていた。



(それにしても、38年間よく保存してあった！)

また、この本には寛永9年(1632年)に森本右近太夫という日本人が数千里の海を渡ってアンコールを訪れ、父(義太夫)の安全を願い、亡き母の霊を弔うために仏像四体を納めたという筆で書かれた落書きが残っているという記載があり、何十年もの間頭から離れなかった。ぜひともこの目で確かめなければならない！落書きが消えてしまう前に訪れなければならない！

アンコール遺跡修復のボランティアをしている知人から、訪れるなら比較的暑くない乾季がいいとのアドバイスを受けて、今回の旅行を決行することとなった。

平成19年12月30日(日) 東京 晴れ、バンコク 晴れ

10時55分発JL717便、バンコク行きに搭乗し、定時の出発となった。機内では「レミーの美味しいレストラン」や「釣りバカ日誌18」等を見て過ごした。

タイは日本の約 1.4 倍の国土を有し、人口は 6200 万人。大部分が仏教徒であり、ラーマ 9 世を国家元首に仰ぐ立憲君主制である。バンコクまでは 6 時間ちょっと。スワンナプーム新国際空港は広くてきれいであり、10 年近く前にトランジットしたバンコクの空港のイメージとはかなり異なる感じを受けた。空港を出ると乾季という割にはカラっとしておらず、ちょっと蒸し暑く感じたが、ピアザさんという女性が迎えてくれ、左手に建設中のモノレールを見ながら、ハイウェイをワンボックス車で一路ラディソンホテルに向かった。

17 時半にチェックインし、18 時 45 分少し前にジャスさんという女性が迎えに来て、タイの古典舞踊と地元料理の夕食となった。



(店の入口と食事風景、春巻や野菜炒め、豚肉と豆腐のスープ等のタイ料理)



(このようなレストランは圧倒的に日本人が多く、古典舞踊はちょっと退屈した)

タイ料理といったらトムヤンクン位しか知らず、ピリカラのイメージであったが、それほど辛くもなく料理はまあまあであった。古典舞踊はすぐに飽きてしまったが、日本の古典舞踊でも退屈してしまうのだから仕方がないと言えよう。できれば人気のニューハーフショーの方がよかった・・・。

12 月 31 日 (月) 晴れ

7 時 15 分にロビーに行き、セングさんという背の低い女性ガイドとともに出発した。バンコクではころころとガイドが変わってしまい、ちょっと戸惑ってしまったが、小さな旅行社ゆえの自転車操業のせい？

30 分程でチャオプラヤー川東岸に到着し、船で対岸のワット・アルン (暁の寺) に向かった。船着場までの道には露店が出ていて、バナナや種々の食べ物が売られていたが、東南アジアらしい雰囲気を感じた。



(露店が出て賑やかだった)

乗船すると川面に反射する朝日がキラキラと輝いて、バンコクのイメージに相応しく、タイにやって来た実感が湧いてきた。暁の寺の名の如く、昇る朝日をバックにキラメク姿はさぞや美しいことであろう。ワット・アルンの大仏塔は75mもの高さがあり、ヒンドゥー教のシバ神の住む聖地カイラーサ山を形どっていると言われてはいるが、美しい装飾が施されており、その精緻さには驚かされた。



(大仏塔は対岸からも良く見え、凝った装飾は見事だった 急な階段は怖かった)

おそろしく急な階段を登ると、川を隔ててワット・ポーや王宮、バンコク市内が見渡せて、素晴らしい眺望を楽しむことができた。このような階段で滑ったり、落ちたりしてケガをした人はいないのであるだろうか。ちょっと心配になってしまった。



(見晴らしがよくて、爽快な気分浸れた)

8時半を廻ると、再び船に乗って戻り、ワット・ポー（涅槃寺）を訪れた。まずは自分の生まれた月の像に金箔を貼り付けるというところを抜け、キンピカの大寝釈迦仏を見学した。全長が46mもあり、涅槃に達し悟りを開いた姿を表現しているという。奈良の大仏も当初は金メッキが施されてキンピカだった

というが、ちょっと落ち着かない感じがし、やはり、漆黒の大仏の方が落ち着いて重厚感があるように思えた。



(涅槃寺、誕生月によってそれぞれに金箔を貼り付ける キンピカの涅槃仏は見事)

ここはタイ式マッサージの総本山にもなっているということだが、マルコポーロの像の脇を抜けると、ツボ・経絡の図が描かれているお堂があった。境内にはタイルの破片で装飾された仏塔が林立していた。



(マルコポーロの像と経絡の図、林立する仏塔)

続いて、タイで最も格式が高い王室寺院ワット・プラケオ（エメラルド寺院）と王宮を訪れた。入口からも見える3つの塔はバンコクのシンボルとも言われ、特に金色に輝く仏舎利塔プラ・スイー・ラッタナ・チェーディーは目立っていた。内部に入ると、回廊に描かれているラーマキエン物語の壁画に目を見張った。このように鮮やかに保持するためには幾度もなく修復がなされてきたことが伺える。



(上部テラスにある3つの塔はバンコクのシンボル 回廊には美しい絵が描かれていた)

中はたくさんの参拝客・観光客で溢れていた。また、国王が着たことからラッキーカラーとなったという黄色やピンクのTシャツ・服がやたらと目に付い

た。僕も黒いリュックでなく、黄色いのを持ってくればよかったなあと思った。精密なアンコールワットの模型もあったが、19世紀末に造られ、傷みの激しい本物よりも美しいのではないかとと言われるほど精巧であるという。黄金の仏塔は阿修羅と猿神が交互に台座を支えているが、その間に入ってパチリ…。



(ワット・プラケオと精巧なアンコールワットの模型、黄金の仏塔)



(本堂は大晦日と元旦にお参りする人が多いという)

本堂には本尊として高さ 66cm のヒスイ製の仏像が安置されており、暑季、雨季、寒季のいずれかの衣を纏い、年に 3 回王様自らの手で衣替えがなされるという。このヒスイの色からエメラルド寺院と言われるそうだが、もし全部がエメラルドでできていたら、その価値はエンドレスであったであろうと思われる。大晦日ということもあってか、本堂は参拝者で溢れかえっていた。



(ポロム・ピマーン宮殿 チャックリー・マハー・ブラサート宮殿 再び3本の塔)

ワゴン車を待っていると、フルーツや水、ジュース売りが出ていて、昔の上野公園の雰囲気があった。お昼にはまだ少し早かったが、11時半に「コカ」でタイ式しゃぶしゃぶ(タイスキ)のランチとなった。タイスキとは「タイ風ス

キヤキ」の略称ということだそうだが、どう見てもスキヤキとは異なり、しゃぶしゃぶというか普通の鍋であり、最後のメは卵で綴じたおじやであった。

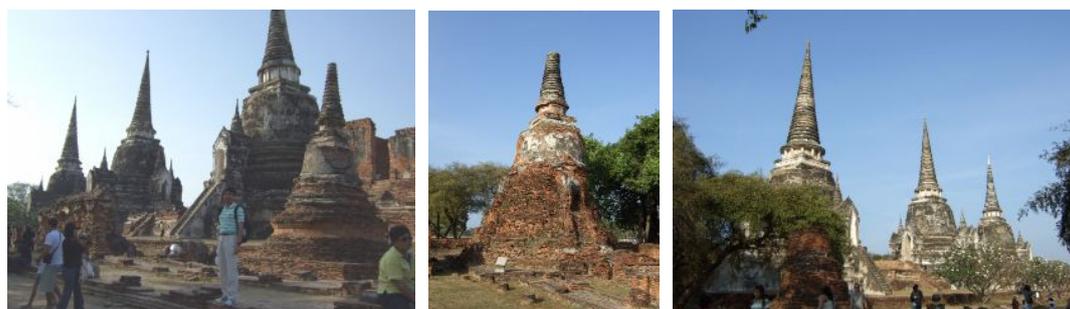


(タイスキは中々おいしかったーコカは日本にも支店がある ミッキーではない！)

食後は宝石店とシルク店で買い物タイムとなったが、特にめぼしいものも無く、退屈な時間潰しとなった。

その後はアユタヤを目指し、北へ向かって 80km のドライブとなった。1350 年から 417 年間にわたり、35 代の王がこの地でアユタヤ王国の歴史を展開した。日本で言えば、鎌倉のような感じの古都に当たるだろうか。

15 時過ぎにアユタヤに到着し、ワット・プラ・シー・サンペットから観光した。バンコクのワット・プラケオに相当する王室の守護寺院であり、1491 年に建立され、1500 年には高さ 16m、171kg もの黄金に覆われた仏像が建造されたが、ビルマとの戦争で破壊されてしまったという。セングさんが、アユタヤはビルマ等と 24 回戦争して 2 回しか負けなかったと強調していたが、仏像も僧院も跡形もなく破壊されて黄金も持ち去られてしまったということは、壮絶な戦いが繰り返されたことが想像された。



(3人の王が眠るワット・プラ・シー・サンペット)

次に、復元された大仏寺ウィハーン・プラ・モンコン・ボピットを参拝したが、高さ 17m もある黄金色に輝く大仏が見事であった。すぐ近くのエレファント・キャンプでは象にのって遺跡周囲を廻る 15 分ほどのエレファント・バック・ツアーがあり、日本人観光客で混雑していた。待ち時間が 20 分というので乗らずに、クンペーン・レジデンス周囲を散歩した。遠くからワット・プラシー・サンペットの尖塔を眺めることができた。また、間近での象の芸を見ることができた。



(青銅仏ではタイ最大級 ズウの芸と青色に塗装されたゾウの水浴び)

続いて、破壊された仏像が並ぶワット・プラ・マハタートを観光した。木の根に取り込まれてしまった仏頭や、苔むしたレンガ積みの仏塔が栄枯盛衰を感じさせた。ビルマ軍によって破壊されてしまって、ほとんどの仏像には頭が無く、戦争と宗教の虚しさを感じられた。われわれの入場後は係員が帰ってしまい、入場無料となっていた！



(はい、ポーズ！ 木の根に囲まれて神秘的な雰囲気漂わせる仏頭)

ちょうどサンセットの時間になったが、木が邪魔になって、上手く写真を撮ることはできなかった。国家間の利害だけでなく、ビルマとは宗教も絡んだ戦争が行われたようだが、宗教戦争というのは有史以来、絶えること無く続いている厄介なものである。強い宗教心を有していない現代日本人にとって、理解しにくい問題のひとつであろう。



(ビルマ軍によって破壊された跡はちょっと修復されていたが、虚しさを感じさせた)

18時を廻って、遺跡近くのレストランで夕食となった。アユタヤはチャオプラヤー川とその支流に囲まれた中州にあり、周りを川で囲まれた島のようになっている。川がお濠のような感じになった城塞都市といったところであろう。川で獲れる手長エビが名物というので、ちょっと期待していたのだが、昨夜と

同じようなタイ料理の夕食であった。この辺りの子供のアルバイトにでもなっているのか、笑顔を絶やさず、素直でかわいい子供たちの演奏は心地よかった。踊りも昨夜よりもあっさりしていて良かった。



(昨夜と同様、夕食は古典舞踊とタイ料理であったがアユタヤの方が美味しかった)



(子供達による演奏では、タイの音楽の他「上を向いて歩こう」等、日本の曲もあった)

僕は木琴のような楽器を叩かせてもらったが、鍵盤が縦に並び、横に3段になっていて弾きにくかった。



(タイ製の木琴?を弾かせてもらった。踊り子さんには手を触れなかったよ!)

この店の入口には、橋本龍太郎元総理の奥さんが来店した際の写真が掲げられていたのが印象的だった。



(食後はワット・プラ・ラームとワット・プラ・シー・サンペットの夜景を撮影した)

帰りは、途中のGSで給油休憩となったが、その際、セングさんから“タイは医者におまかせ。日本は患者がうるさくて、医者は大変”と、誰に聞いたのか、日本の医療事情に詳しい話を聞かされた。

2時間ほどでバンコクのホテルに戻ると21時を廻っていた。2時間早い日本では23時過ぎで、ちょうど紅白歌合戦も盛り上がっているだろうなあと思ってBSのNHKで少し見た。白組の勝利だった。

平成20年1月1日（火） 晴れ

明けましておめでとうございます。元日とはいえ慌しく5時半にホテルを出発し、8時発バンコク航空4903便でシェムリアップに向かい9時に到着した。



(バンコクの空港とシェムリアップ空港に到着した飛行機と建物)

カンボジアは日本の約半分の面積で、人口は1340万人。ほとんどが仏教徒であり、90%を占めるクメール人、5%（難民としてはもっという？）のベトナム人とその他の少数民族によって構成され、ノロドム・シハモニ国王による立憲君主制をとっている。

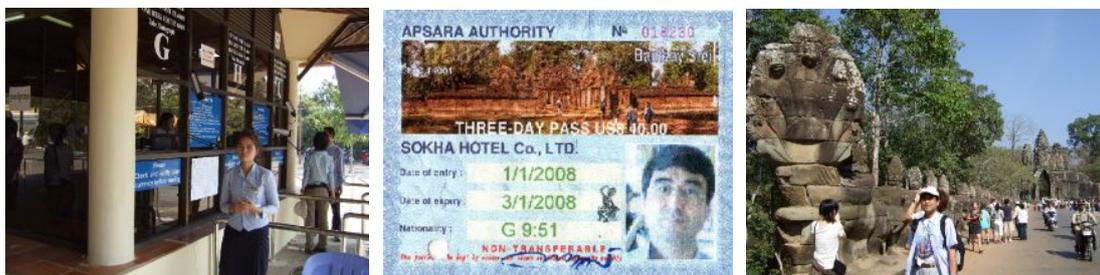
シェムリアップ空港は閑散としており、ビクトリアフォールズ（ジンバブエ）のそれを思わせた。現地ガイドのタクさんは背が高く痩せていて、東国原知事（宮崎県）に藤木君（ちびまる子ちゃん）と麻生太郎を混ぜたような顔をしていた。ワゴン車に乗り込むと、「カンボジアというと、何を思い浮かべますかあ〜？」ということから始まった。僕は「カボチャ、アンコールワット、ポルポト…」等を口にした。25歳の彼は、シェムリアップ市内へは15分かけてバイクで通勤しているとのこと。



彼は、年末年始、3月、5月そして夏休みには日本人が多く、その時季はとも忙しいが、あとはヒマで、仕事が無い時は収入も無くて困ると話していた（歩合制の収入という訳ね！）。最近では年間を通して韓国人観光客がダントツに多いということであった。

クメール王国は最盛期にはインドシナ半島の大部分とマレー半島の一部までを領土とした大帝国であった。遺跡の数が700を超えるというアンコール遺跡は、9世紀初めから約600年の間、カンボジアに君臨したクメール王国の栄華を極めた建造物であり、遺跡全体が世界遺産に指定されている。

いよいよ、待ちに待ったアンコールの観光がスタートした。『アンコールワットの秘密』に記されているが、アンコールは誰が造ったのか？ 何故ほろびたのか？ という2つの命題に対する回答を、自らの目で確かめなければならない。38年分の好奇心を奮い立たせて、少し気合をいれて観光に臨んだ。



(料金所で顔写真入りの遺跡共用チケットを作成してからアンコールトムへ進んだ)

バスはアンコールワットを右に見ながら、まずはアンコールトムへと向かった。アンコールトムとは“大きな町”という意味で、アンコール王朝最後の栄華を誇ったところである。不死のシンボルとして崇拝されるナーガの欄干をはじめ、左側に神々、右側には阿修羅の像が並ぶ南大門に続く橋を進んでいった。



(周囲約12kmの城壁はお濠に囲まれている 上部の顔の彫刻はユニーク)

南大門は四面像を最頂部に配した高さ23mの門で、四面像の顔は長さだけで約3mもあるというが、なんともユニークで漫画チックな顔であった。世界中(国中)の人々に慈悲の心が届くように顔は四面に向いているという。

門をくぐると、野生のサルが警備員に追われて逃げていく場面に直面した。一匹はペットボトルを手にしていたが、逃げる後姿は賢いというよりも、ちょっと狡猾な感じがし、観光客慣れしているように思えた。

この門内にはたくさんの家が建てられて多くの人が居住していたというが、木造の建設物はすべて崩壊してしまい、石造りのもののみが現存しているという。石造りの建物は熱せられて暑くなり、いつまでも熱が逃げないので住みにくく、住居としては木造が適しているのだ。

バイヨン寺院をはじめとするアンコール遺跡の石造りの建物は、人の居住用ではなくヒンドゥー教の寺院であるということが、石に刻まれた文字から判明しており、これらの石は砂岩から成っており、数十キロ先から象によって運ばれてきたようだ。ヒンドゥー教徒といたら、インドを中心とした地方であるが、そのような所からやって来た人々が寺院を造ったのであろうか？カンボジアの伝説、神話には先祖がインドからやって来たと言語の多いという。



(いきなりサルが出てきた！ アンコールトムの中心に位置するバイヨン寺院)

大昔、メコン川に沿って下って来て、森に住み着いたダクという男がいた。彼は家族とともによく働き、手に入れた食べ物はナーガに捧げる信仰深い男であった。ある夜ダクが働き疲れて眠っていると、夢の中にナーガが現れ、「ダクよ、目が覚めたら森を出て、大きな川のほとりに出よ。柔らかい水辺に、お前の手にある魔法の種を蒔け。月が7たび満ちて欠ける頃、その種は熟れて重い穂をつけよう。おまえはそれを刈り取るのじゃ。すると、おまえの前に若い王子が現れる。その王子をワシの所に連れてまいれ」

ダクは、ナーガの言うとおりにした。やがて稲の穂が実り、刈り取ったとき、悲しい顔をした金色の鎧をつけた男がやってきた。西の国アーリア・デッカの王子カンブであった。彼の妻はシバ神の養女メラで、天の舞姫だったが、シバ神の気まぐれで取り戻されてしまったという。彼をナーガのもとに連れていくと、カンブはナーガと月の娘との間に生まれたソマアと結婚した。ダクとダク一族はカンブ王子を王に頂いて、大きな川のほとりに新しい王国を築きあげた。カンブの子たち、というので新しい王国の人たちはカンボジアと呼ばれた。これが国名の起こりであるという。

長い間放置されたアンコールの再発見当初、誰かが、どこからか来て、アンコールを造り、突然、どこかに消えてしまった…。フランス人たちはそのように考え、これがアンコールの神秘とか謎とか言われる所以であるが、以上のような伝説も勘案すると、アンコールを造ったのは、外来の人と地元民との雑種

混血、現在のカンボジア人の祖先のクメール族であろうことが理解できた。



(タクさんは一生懸命説明してくれたが、ちょっと日本語が分かりにくいところもあった)

アプササの踊りのレリーフは、膝や肘、手首等の軽やかな屈曲が印象的で、踊っている躍動感が伝わってくるような素晴らしいものであった。チャンバ(ベトナム)との戦いに行くクメール人の後には中国人の列が続いているレリーフや戦いの勝利を祝ったり、トンレサップ湖での猟の様子を描いたりした種々の彫刻群は一大絵巻をみるような感じであった。



(砂岩は彫りやすい石であるというが、細かい彫刻は見事であった)

アンコールトムの中心にあるバイヨン寺院は、クメールの覇者と呼ばれるジャヤ・バルマン七世によってメール山(須弥山)を象徴化して造られたものである。ヒンドゥー教の影響でテラスは東向きになっていて、その先は死者の門へと向かっている。まるで迷路のような回廊を進んでいくと、たくさんの観世音菩薩を目にすることができた。観世音菩薩の四面像は全部で54あるというが、微妙に顔立ちが異なっている様は三十三間堂(京都)を思い起こさせた。



(微笑を湛えた菩薩像は紙幣(200リエル)にもなっている)

クメールの微笑みと称される観世音菩薩はバイヨン寺院の‘名物’となっており、写真撮影も順番待ちであった。それにしても、これらの製作は随分と大事業であり、何十年も要したことが推測された。国王の権力のもと、国力を使

い果たすような大工事が続けられた陰では、多くの人々は貧しい生活を余儀なくされたのであろうと想像された。

王族たちが閲兵を行った王宮前にあるのが象のテラスであり、ライ王のテラスに向かって約 300m も続く見事なものであった。象のレリーフやガルーダとガジャシンハが交互に並ぶレリーフが続いていた。王のテラスの左奥には王宮があったそうだが、木造であったためにその痕跡は残っていない。また、王のテラスの先には勝利の門があつて、ここから進軍していったそうだ。ガルーダもナーガ同様、インド神話に登場する架空の動物で、ヴィシュヌ神が乗る怪鳥ということである、ナーガはヘビの尾とコブラの首を持つ蛇神で、ガジャシンハはライオンとガルーダが一体化したものである。



(象のテラスは広大で、大部隊の閲兵にも対応できたであろう)

続くテラスの上にはレプリカのライ王像が黄色い衣を纏って鎮座していた。ライ王はライ病にかかった王という説、ヒゲとキバがあることから閻魔大王とする説があるという。そういえば、アンコールが滅びた原因にライ病という説もあることも聞いたことがある。滅亡についてはまた後で考えてみよう。三島由紀夫の戯曲「ライ王のテラス」はこの地を訪れてライ王伝説に魅かれて書いたという。三島といえ、衝撃的な割腹自殺は僕が中1の時であった…。



(ライ王像とガルーダ、神々と阿修羅が描かれたテラスの内部の彫り物)

アンコールトムの観光を終えると昼食となった。バイヨン I という“味のよさ、料理の種類が多さでトップレベルのカンボジア料理店”であったが、パクチーの強い香りで食欲が一気に失せてしまい、カンボジア料理なんて食べられない！ これからの食事は一体どうなるんだろう、と暗い気分になってしまった。デザートのパパイヤとパイナップルも今いちであった。



(パクチーの風味が強くてダメだった ついにアンコールワットにやって来ました！)

14時半を過ぎ、いよいよアンコールワット観光となった。12世紀前半にスールヤヴァルマン2世が建立したヒンドゥー教寺院で、アンコール最大である。クメール語で“寺院のある町”という意味を有するアンコールワットはクメール人がヒンドゥー教の宇宙観を具体化したものと言われている。中央祠堂は世界の中心で神々が住むメール山(須弥山)を、周囲の回廊は雄大なヒマラヤ連峰を、そして環濠は無限の大洋を象徴しているという。また、ナーガは不死の象徴で、神と人間界をつなぐ架け橋と見立てたそう。カンボジアの国旗にはアンコールワットが描かれており、将にカンボジアの象徴である。

左右に環濠を見ながら、左側がきれいに修復されている橋を渡って進んだが、アンコールワット修復のボランティアをやっている知人から、この橋を修復していることを聞いていたので、‘ここかあ！’と思わず納得してしまった。修復されていない右側はゴツゴツとして歩きにくくなっていた。



(ここでもナーガが迎えてくれた アンコールワットの尖塔には緑のカバーが！)

待ちに待ったアンコールであったが、近づいていくと尖塔に緑のカバー(工事中か!)が掛けられていて、ちょっと興ざめしてしまった。すぐにカンボジアの大臣に連絡して、明日までに緑のカバーを取り除くれるよう、タクさんをお願いしたが…(冗談!)。緑のカバーは、少しは観光客に配慮している色のようなので何とか我慢できたが、青や黄色だったら(特に黄色だったら)腹が立ったなあ…。

定番と言える池に映るアンコールワットを見、狛犬のようなシンハ(獅子)に迎えられて西塔門を進んでいった。



(池面に映るアンコールワット 4体のシンハに迎えられて西塔門テラスへ進む)

森本右近太夫の落書きは日本人に有名なスポットとなっているとのことであったが、『アンコールワットの秘密』で読んで以来、いつかは見にいかなければならない、という使命感に似た感情を38年経って達成することができて、非常に満足した。沐浴の池の跡といわれるプール様の脇の廊下、第一回廊と第二回廊とをつなぐ廊下の南側の千体仏の所の柱に、筆書きのかすれた落書きが堂々と残されていた。



(森本右近太夫の落書きには感動した！)

秀吉のはじめた朱印船貿易が、1600年(慶長5)の関ヶ原の戦い～江戸幕府の成立(1602年)等を経て、1635年(寛永12)の渡航禁止に至るまで、多くの日本人が南方諸地域に進出していった事実を確認することができたような気がした。また、このように仰々しい落書きができることや、年代的に寛永9年(1632年)といったら、アンコールも衰退して廃墟になっていたであろうと推測された。



(中庭から中央塔を望む)

(混雑する第一回廊と天国と地獄のレリーフ)

千体仏の脇から一度中庭に出てから、第一回廊に入った。「天国と地獄」のレリーフ（上段から極楽界、裁定を待つ者の世界、地獄）やヒンドゥー神話に基づく「乳海攪拌」のレリーフを見ながら進んだ。極楽界（天国）と裁定を受けに向かう様子と地獄が描かれた3段のレリーフについて、また1000年にわたる乳海攪拌（天地創造）によって不老不死の薬アマリタが生じ、その争奪が行われた説明等を聞きながら廻ったが、回廊は観光客でゴッタ返しており、とても騒々しい見学となった。



（乳海攪拌はヒンドゥー教の天地創造神話であり、奥が深かった）

特に韓国人観光客が多く、コリアンガイドの1人が傘を指示棒代わりにして説明していたが、これだけ人が多いと、誤って傘の先で彫刻を傷つけてしまう恐れもあるだろう。率先して遺跡を守らなければならない人間がする行為ではない。たいへん遺憾なことである。それにしても、このような所はもっと落着いて静かに観光したかった。

再び中庭に出て、中央祠堂を構成する第三回廊に登る階段の前に立った。すると‘修復工事のために第三回廊は見学不可’ということで、楽しみにしていたアンコールワットの急階段を登ることができずに、とっても残念であった。



（第三回廊は昨年10月から見学不可とのこと。この急階段を登れず、残念！）

中央祠堂の5基の尖塔は、重なって3つに見えたり5つに見えたりと、昔、都内にあった“おぼけ煙突”を思い出させた。

標本採集のためにこの地にやってきたフランス人博物学者ムーオは、現地人が迷信的な恐怖から近づかなかったジャングルの奥地に入り込んで、最初にこの5つの塔を目にしたという。そのときの驚きといたら、一体どのようなも

のであったのだろうか。‘魔法を掛けられた石の都’の偶然の発見（再発見）は、興奮と歓喜と恐怖の交錯したものであったことが推測される。誰か（見たことも無い原住民）が住んでいるのではないか、亡霊や化け物の館なのではないか…等、畏怖の念を抱きながら進んだ道程であったことが想像された。

周囲に高く聳える数本のヤシの木は、とても涼しげで印象的であった。かなりの年輪を重ねているようで、アンコールの歴史をずっと見続けてきたのであろう。

16時半を廻り、アンコールワットを後にしてプノン・バゲンに向かった。



（プノン・バゲンでの夕陽鑑賞 もの凄い混雑はラッシュ並み！）

山道を15分ほど登り、さらに急な階段を上ってプノン・バゲンの丘の頂上に到着した。山道も、丘の上もラッシュなみの混雑であった。各自夕陽を鑑賞して17時40分に集合ということであったが、ちょうど集合時刻の頃に日没となった。日没後にセミが鳴き始めたが、息づきが無くキーが高い鳴き声は、とてもセミとは思えなかった。タクさんにセミにしては鳴き方がおかしいのではと確認してみたが、彼はカンボジアのセミはあのように鳴くと強く主張した。

日没後、18時半過ぎから夕食となった。バイヨン寺院の裏側の広場でバイキングディナーとなったが、食事に向かう途中、一瞬、雨かなあと思うおしめりを感じたが…どうやらセミのおしっこだったらしい…。やられちゃいました！



（バイキングのディナーとテーブルに迷い降りたセミ バイヨン寺院の夜景）

同じテーブルになった札幌から1人で来ている女性は、ゲストハウスに宿泊し、そこで知り合った日本人達と車で「天空の城ラピュタ」のモデルになったという寺院を訪ねる予定という。なかなか行動的だが、ポルポト政権時代の地雷はまだ相当数が撤去されずに残っているし、カンボジアってそんなに安全なのかなあ…。

食事をしていると、アンコールトムの彫刻にも描かれていたアプサ（天女）達が点灯されたバイヨン寺院に現れ、アンコールワットに相応しい雰囲気醸し出した。アプサダンスの動きは、ナーガの動きを表現したものとされるそうだが、くねくねとした手の動きがヘビを表しているのかあ。アプサ達を間近で見ようとカメラを抱えて駆け寄ったが、彼女たちは短い時間で退いてしまいベストショットは撮れなかった。食事を終えると、松明が灯る薄暗い道を進んで特設ステージへと移動した。



（アプサダンス、少数民族の踊り、クメールドラムなど、ちょっと長かった）

神秘の祭典「アンコールナイト」は年に15回しか開催されない日本人向けのイベントで、“是非とも一度は見たい”と、各社のパンフに記されているので、楽しみにしていた。

祝福のダンス、クロバダンス、そして日本人として初めてカンボジア王立プノンペン芸術大学附属芸術学校古典舞踊科を卒業した山中ひとみさんによる特別ダンスと続いた。彼女はお茶の水女子大の哲学科で美学美術史を専攻し、タイ王立チェンマイ舞台美術学校で学んだ後、クメール文化に魅せられて2003年に日本人で初めて芸術学校を卒業したという。随分と変わったものに興味を持ったものだが、哲学的に美学を探求した結果なのであろうか。

続く孔雀ダンスが終わると抽選会が行われた。抽選会は座席番号のAの〇〇番とか言うだけの素っ気無いものであり、景品については何も説明が無かったが、一体何だったのだろうか？ちょっと気になった。

その後、アプサダンス、プロイ・ソウイダンスと踊りが続いて飽きてくると、威勢の良いクメールドラムで終了となった。抽選会で景品をゲットしていれば、もっと楽しかったかもしれない。

車でホテルに戻る途中、ライトアップされたアンコールワットが視界に入った。満点の星空の下とても神秘的で、できれば停車してじっくり鑑賞したかったが…。

1月2日（水） 曇り・晴れ

アンコールワットを照らす幻想的な日の出を鑑賞するために、朝早く出発した。6時少し前には西塔門に入り、少し冷えたので首にバンダナを巻き、左側の

壁に腰掛けて待った。夜明け前のアンコールワットには、どこから来るのか次から次へと人が集まってきた。6時20分を過ぎると辺りは大分明るくなってしまい、朝焼けに輝くアンコールワットを望むことはできなかった。期待していた瑠璃色に輝く姿を仰ぐことができず真に残念であった。しかし、朝早い時間帯のため、池には睡蓮のピンク色の花が咲き、昨日とは異なる雰囲気味わうことができた。



(アンコールワットの日の出を見ようと早起きして出かけたが、曇ってしまい残念！)

一度ホテルに戻って朝食を摂った後、バンテアイ・スレイに向かった。シェムリアップの町はホテルやショッピングセンターがいくつも建設中であり、更なる観光化に向けて急激に変化しているように思われた。また、足場が弱々しい木(南国特有の曲がっている木)であるのが印象的だった。以前、中国(西安)で竹の足場がしなっているのを見て驚いたが、地震が無いので、このような頼り無い足場でも十分なのだろう。

50分程でバンテアイ・スレイに到着した。この寺院は967年、当時のアンコール王朝の摂政ヤジュニャバラハの菩提寺として建設されたという。「東洋のモナリザ」で有名なこの遺跡は赤い砂岩で造られており、女の人(スレイ)の砦(バンテアイ)という意味に相応しく、優しい色合いをして洗練されている感じがした。

リングを模した像が並ぶ参道を抜け、カーラに乗るヴィシュヌ神が描かれた第一周壁の門をくぐると、こぢんまりとして落ち着いた感じのするバンテアイ・スレイの寺院が一望できた。



(赤い砂岩で造られ、女の人(スレイ)の砦に相応しい 門の彫刻も見事である)



(環濠越しに中央祠堂を望む)

第二周壁の門の破風にはカーラの上に座るヴィシュヌ神が、経蔵の破風に描かれた物語性のある壁画の中央には踊っているシバ神、右側には太鼓を叩いている雷神、インドラ神が描かれていた。



(第二周壁の門と経蔵、中央祠堂)

ド・ゴール政権の文化相も務めたイケメン作家のアンドレ・マルローは、1923年にこの「東洋のモナリザ」を盗み出して逮捕されたという逸話がある。それほど魅惑的なデバター像は、ロープが張られていたために少し遠めからの鑑賞となった。彫りの深い優美な姿は本家“モナリザ”の神秘さとは異なる印象であったが、ちょっとふくよかなラインは“モナリザ”の称号に違わぬ素晴らしいものであった。特に、この付近は観光客で溢れかえっていたが、「東洋のモナリザ」に会えて、何となくホッとするような気持ちになった。そんな雰囲気の中、“バンテアイ・スレイ”と言ってシャッターを押す現地ガイドがいたが、ちょっと耳障りであった。



(東洋のモナリザと呼ばれるバンテアイ・スレイ一番の人気レリーフ)

その後、どうしても気球に乗りたいというわれわれの強い希望で、アンコール・バルーンに乗ることになり、ちょうど 12 時からの搭乗となった。200m ほど上空からの眺めは素晴らしく、アンコールワットや、その後方に続くジャングル、夕陽を眺めに行ったプノン・バゲン、遥か西バライなども望むことができた。



(黄色いバルーンは昨日のプノン・バゲンでも目にしたが、爽やかで最高！)

バルーンの直径は 23m あるということだが、コントロールパネルを覗いてみると、その温度は 42°C にもなっていた。真夏だったら 50°C (60°C?) を越えてしまうのだろうか。15 分程の短い観光であったが、心地よい風を受けてベリーグッドであった。



(昨日行ったプノン・バゲンや遥か西バライまでも望めた)

お昼はインターナショナル・ランチということであったが、日本人が多いバイキングであった。午後の観光メニューも一杯なので、アルコールはやめてミックスジュースを飲んだが、ランの花と人参！が添えられているのには笑ってしまった。



(ミックス・ジュースにはランと人参が！ タクさんのバイクでケーキを買いに行った)

今回のツアーは添乗員がおらず、細かい配慮がないので、僕の誕生日を気遣

うこともなかった。ちょっと迷ったけれども1月3日の誕生日で満50歳という節目になるので、自腹でバースデーケーキを買おうと決意し、タクさんに話したところ、昼食後にバイクで買いに行くことになった。彼の50ccのバイクに二人乗りをすると、スピードメーターやフエルメーターは壊れていてちょっと不安になったが、爽快なツーリングを楽しむことができた。シムリアップの中心を抜けて、仙女餅家（アプサラ・ベーカリー）までは10分ほどで到着した。一番美味しそうだったカラフルなケーキを選んで、名前等を入れてくれるようお願いした。夕食前の18時過ぎに取りに来るという約束をして、\$15を支払った。

バイクといえば、こちらではホンダとスズキがほとんどで、ホンダの方が人気があって少し高めということであった。タクさんのバイクは中古のスズキであった。



（高床式の住居は雨季・乾季の水の増減にも対応できるような造りという）

16時になるとトンレサップ湖に到着し、クルーズがスタートした。クルーズといっても大きな客船で廻るのでなく、ディズニーランドのジャングルクルーズのような小さな舟であった。



（ジャングルクルーズ様の舟でトンレサップ湖の遊覧となった 船上の学校があった）



（日本の援助で造られた船上の体育館もあった ボートピープルの生活は苦しい）

ボートに住む人々はベトナム人が多いというが、舟（住居）の下で魚を飼っていたり、野菜や雑貨を売っている舟があったりと、町に出かけなくても生活できるようになっていた。また、30～40%くらいは井戸水を飲むが、残りはトンレサップ湖の水を使用しているとのことであった。生活廃水を垂れ流している、このような茶色のドロ水を飲んでお腹壊さないのであろうか。日本や韓国政府等の援助による学校や体育館があり、建物の脇には各々の国旗が小さく描かれていた。

たらいの舟に乗った子供（6～8歳くらい？）が物乞いに来たのにはビックリしてしまった。たらいの中に入ってくる水をカップでかき出しながら、われわれの舟に擦り寄ってきた。他にも、カヌーのような小さな舟で缶ジュースやバナナ等を売りに来るボートピープルもいた。彼らはベトナムからの難民というが、タクさんの言葉の端々（強さ）からカンボジアとベトナム両国の関係が伺えるような感じがした。



（たらいの舟に乗った子供が物乞いに向かう！ 舳先でちょっと怖いピース）

トンレサップ湖は‘伸縮する湖’といわれ、雨季になると乾季の3倍の約9000 km²（琵琶湖の13倍）にも膨れ上がるそうだ。そのため、湖畔に住む人々は雨季になると高台に引越しをしなければならないし、船上の建物が造られるわけだ。元来、この地方の高床式の建物は、洪水に対応できるようになっているのだが、高台にまで移動しなければならない程、水量が増えるということである。

船着場の近くには、たらいの舟に乗った片腕の無い子供がいて、物乞いをしていた。地雷で腕をとばされたのか、物乞いのために親か誰かが傷つけたのか、とにかく悲惨な感じがした。



（ヴィミエントマイ魚の展示会場では200種以上もある魚やワニの説明を受けた）

この展示場では、淡水魚としては世界有数の漁獲高を誇るこの湖に生息する魚の説明や、ハンドバッグ用に飼育されているワニなどを目にする事ができた。また、ヘビを首に巻いて写真を撮るアトラクションがあったが、モロッコやシンガポールでも見かけたおぞましい光景であった。今回、一緒のパーティーでこれをやった人がいてビックリした！



(オっとう～！後光を浴びているよ～

トンレサップ湖に沈む夕陽)

トンレサップ湖に沈む静かな夕陽を鑑賞してからクルーズを終え、バスでシェリムアップ市内に戻ると、18時30分になっていた。タクさんと共にアプサラ・ベーカリーに行くと、オーダーしたケーキはすっかり忘れ去られていて、もちろん名前も1月3日という文字も入れられていなかった。急いで入れてもらい、それを抱えて夕食のレストランに入った。



(カンボジア風中華料理は旨かったが…！ 青色のクリームがドクドクしいけど?)

麻婆豆腐や生ハルマキ、炒めもの等、カンボジア風中華料理は今回の旅行の中では一番美味しかった。バースデー・パーティーの乾杯用にココナツのワインを頼んだが、これも結構イケた。あまり期待していなかったケーキであるが、“海の家ラーメン”ではないが、ドクドクしい青色のクリームにも拘らず意外にデリシャスであった。スポンジの濃いピンク色にも驚いたが、生クリームもまあまあであった。こちらの警官の月給が\$20ということだから、\$15というのは高級な部類に入るに違いない(^_^)v

夜、このケーキを大目に食べた僕と25歳の若い男の子がお腹を壊してしまったが…生クリームが原因だったのかなあ(T_T)

1月3日(木) 晴れ

いよいよ最終日となってしまった。9時にホテルを出発し、活気ある市内を見ながらロリュオス遺跡に向かった。カンボジアでは朝ごはんは外(主に屋台)で食べるのが主流ということで、多くの人々の朝食風景も目にすることができた。

昨夜は腹痛のために何度もトイレに起きたが、細菌性の下痢の場合は菌が出れば治るといふことなので、正露丸のみを服用して様子を見たのだ。お腹の調子は少しずつ良くなっていたが、寝不足はどうしようもなく、とつてもだるく、頭がボーッとしていた。旅先で体調を崩したのは今回が初めてであるが、やはりケーキ(生クリーム)だったのだろうか、それとも生ハルマキだったのだろうか？



(アンコールホテル 活気あるシェムリアップの朝市では果物や野菜等が売られていた)

アンコール地域に移る少し前に王都であったのが南東部に位置するロリュオスである。8世紀末にジャヤ・バルマン二世によって礎が築かれ、後に、インドラ・バルマン一世によって王都として造営されたという。まずはロレイ遺跡からの観光となった。



(ロレイ遺跡はインドラ・バルマンが父や祖先を祀った寺院である)

9世紀末に建造された赤茶けた色の祠堂は、ちょっと脆そうな印象を受けたが、アンコール以前に造られたということに納得してしまった。オレンジ色の衣服を纏った僧侶が、悩んでいるような格好でベンチに腰掛けていたのが印象的であった。門の横にはサンスクリット語によって書かれた碑があったが、クメールとインドとの関係が示唆されるものであろう。



(サンスクリット語で書かれた門碑 プリア・コーは修理中！！)

続いてプリア・コー遺跡を訪れたが、何と修復工事中でガッカリ！ 879年に創建されたプリア・コーはアンコール遺跡中で最古の寺院であり、「聖なる牛」という意味があるという。ロレイ同様、茶の色合いが古い建造物であることを感じさせた。



(インドラ・バルマン一世がヒンドゥー教の神々に奉献したバコン寺院)

20分ほどして、バコン遺跡に到着した。周囲に環濠を巡らし、広くてちょっと落ち着いた感じのする寺院であった。アンコールワットのような形をした一基の祠堂を目指し、だるい身体に鞭打って階段を登った。絵画のように見えるというポイントで祠堂の写真も撮った。



(所々でビン詰めのがソリンが売られていた はじめは何のジュースかと思ったよ?)

道路の脇では、黄色のビン詰めのがソリンが売られていたが、粗悪品であるということであった。その後、マダム・サチコの店でアンコール・クッキーを購入したが、日本人観光客で混みあっていた。隣のカフェ PukaPuka では美味しそうなスイーツのメニューがあったが、お腹の調子が悪いので…。同じツアーの若者がマンゴーかき氷を食べていたが、上に乗っているマンゴーが大

きくて超美味しそうであったので、我慢できずにひと口ごちそうになった。アンコール・まいう〜(^^♪

11時40分を廻って、1階がおみやげ店になっているビルの3階で、カンボジア風飲茶昼食となった。タクさんが中国風の素麺と呼んでいたラーメンは、まあまあの味であったが、パクチーが利いていて不味かったので、パクチーを全部除いてから食べた。デザートにドラゴンフルーツやライチの小さいような感じのランブータンが出たが不味かった。

午後はタ・プローム遺跡の観光となった。ジャヤ・バルマン七世が母のために建造した仏教寺院であったが、後にヒンドゥー教の寺院に改宗されたという。往時には、僧正13人、僧2332人、舞姫614人の他、12640人の人々が住んでいたという。アンコールの遺跡群が再発見された頃、遺跡はメチャメチャになっていたというが、タ・プロームは再発見当時の様子を強く残しているという。



(アンコール遺跡群の発見当時の様子を)

いたる所に大きな石材がごたごたと積み散らかり、スポアン（フロマージュ）の根が大蛇のように伸びて、建物に侵入して飲み込んでいく。

アンコールが滅んだ理由について、今一度考えてみることにする。戦争による破壊、宝物探しと盗掘による破壊、人が手入れしなくなった後のスポアンによる破壊…。しかし、このような大工事、見事な建造物をどうして捨ててしまったのだろうか。戦争によって侵略されても、侵略者たちは何故、アンコールの見事な建物を使用しなかったのだろうか。アンコールに住み着かなかったのだろうか。トレンサップ湖の洪水や、その後にくる種々の伝染病、反対に大干ばつによる食料不足等も考えられる環境要因である。また、先に述べたように、ヤソ・バルマンやジャヤ・バルマン七世等の王も罹患したということから、多くの人々も感染したと考えられるライ病。さらに、建築王ジャヤ・バルマン七世による大工事が国民の力を使い果たし、国力を衰えさせてしまい、領土を守りきれなくなったのだろうか…。

巨大に成長したスポアンに押しつぶされながらも、かろうじて体裁を保っている寺院を見ていると、いろいろな感慨に浸ることができた。



(大蛇のようにみえるスポアン この石の下で胸を叩くと反響する

タ・プローム遺跡はスポアンに侵略されて寂寥感を抱かせてくれたが、同時に、これらの遺跡を修復するのは大工事になるのだろうとも思わせた。

天井の高い空間の脇の壁で胸を叩くと、ボワ〜ンと反響して面白かったが、モスク（イスラム教）にあるミヒラブのようなものなのかなあと思った。



(石の間に木の根が入り込んでいた 毛細血管のようにからまっている木)



(タ・プローム遺跡はスポアンに侵食されてちょっと寂しく感じた)

仏教とヒンドゥー教との宗教争いの償いからだろうか、現在ではインド政府がこの遺跡の修復をしているようだ。



(インド政府によって修復されている)



(オールドマーケットにて 全員で はい、チーズ！)

14時を廻ると、一路オールドマーケットに向かった。この町の核とも言えるオールドマーケットでは、1時間半ほど買い物の時間をとってくれたが、伝統銘菓ノム・トム・ムーンとTシャツを買った後は、タクさんとぶらぶら廻り、彼が帽子を欲しいと言うので、彼にプレゼントとして購入してあげた。

また、イスラエルから来ているという観光客(20代後半~30代?のイケメン)から話しかけられ、4月ころ日本に行くが、物価が高いと聞いているので、いろいろ節約しなければならない云々…、と長話が始まってしまった。例えば、京都だったら一番のお薦めはと聞かれ“清水寺とその周辺”と答えた。嵯峨野も推薦したかったけれど、お寺が多いと拝観料もバカにならないからね。

さらに、僕の方もヨルダンに行った際に死海で浮いた話や、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の三大聖地が共存するエルサレムには是非行ってみたい、さらに「世界の果てまでイッテ Q」で放送された、イスラエル南部のネゲブ砂漠にある世界最大級のクレーターで、雲が滝のように山肌を流れ落ちる神秘的現象を見てみたい等と楽しい会話となった。

その後は近くのレストランの3階テラスで、心地よい風を受けながら30分ほど何もせずにボケーっとしていた。

■歴代の王たちと遺跡

王	都城	年代	寺院・王城
インドラヴァルマン1世	ハリハラーラヤ	9世紀後半	パコン寺院、プリア・コー
ヤショヴァルマン1世	ハリハラーラヤ ヤショダラブラ	9世紀末	ブノム・バケン
ラージェンドラヴァルマン2世 ジャヤヴァルマン5世	ヤショダラブラ	10世紀後半	バンテアイ・スレイ
ウダヤディティヤヴァルマン2世	ヤショダラブラ	11世紀中頃	バプーオン
スールヤヴァルマン2世	ヤショダラブラ	12世紀前半	アンコールワット
ジャヤヴァルマン7世	ヤショダラブラ	12世紀後半	バイオン、タ・ブローム、 プリア・カン、 バンテアイ・クディ、 スラ・スラン

当初は20時55分の便でバンコクに向かう筈であったが、delayということで19時10分発のPG928便に変更になった。シェムリアップの空港では時間があつたので、足裏マッサージを受けたが、まあまあであった。マッサージ嬢はや

けに愛想が良かったが、しっかりチップを取られてしまった。

バンコク航空のプロペラ機には3名のCAがいたが、そのうちの1人が日本人なのには驚いたが、もの凄い美人であったので、さらにビックリしてしまった。このようなローカル（世界的な見地からみて）なルートにはちょっと似つかわしく無い感じであった。バンコクに降りると日本からのメールがいくつも受信され、すぐにそれらの返信を打った。カンボジアは電波の状態が不安定であり、メールがつながらず、結局1件受信があったのみであった。

バンコクの空港でも時間を持て余してしまい、飲茶を食べたり、タイ式ショルダーマッサージを受けたりして過ごした。

JL704 便は 23 時 30 分、定刻通りに離陸した。CA と対面する非常口の横のシートだったので、足が伸ばせて楽であった。

1月4日（金） 晴れ

あまり眠れなかったが、紀伊半島沖を飛行中に、登る朝日を拝むことができたので、ちょっと嬉しかった。日本の初日の出となった—今年も良い年になりますように(^^♪

予定より少し早め、7時ジャストに着陸となった。一応、健康相談室にお腹を壊したことを報告し、第2ビル8時37分発のモーニングライナーで帰宅した。10時半前には家に到着したが、いつもと異なり、1月初旬の日本は思ったほど寒く感じられなかった。地球温暖化の影響なのかなあ…。

あとがき

今回はじめて、旅行中にトラブル（下痢）に見舞われてしまった。大した事にならずに助かったが、寝不足で最終日はつらかった。

何だかんだしているうち、もっと大変な不幸に襲われてしまった—旅行中の手記（メモ帳）が見当たらないのだ。バッグの中になく、家に届いたスーツケースを開けて隅々まで探したけれども、また、機内や空港内で紛失したことも考慮して関係各所に連絡を取ってみたがダメだった。

糸の切れた凧みたいだし、一度は旅行記を断念しようと思った。しかし、今回一緒した長野の中村朝子さんから帰国早々に年賀状を頂き、‘旅行記期待してます’とのメッセージに励まされ、怪しげな記憶からでも何とかならないかと考え、とうとうここま辿りつくことができた。中村さん、ありがとうございました m(_)_m

小学校6年時の学習(学研)12月号の付録の『アンコールワットの秘密』から38年も経ってしまった。今回一番に感じたことは、もっと早く訪れるべきであったということである。“アンコールを見たら死んでもいい”とは思わなかったけれども、森本右近太夫の落書きも見ることができ、38年間の思いを遂げることができて満足である。

実は、小6の学習付録の文庫本『ロケット練習生』(S45年2月1日発行)というのも所有しているのだが、次は宇宙にでも行ってみたいなあ！